

interview



車いすバスケットボール男子決勝でアメリカと戦う川原選手  
©松尾/アフロスポーツ

## 車いすバスケットボール 川原凜選手

# マシンとマシンのぶつかり合う迫力、 多様な連携プレーの魅力を伝えたい

—東京2020パラリンピック銀メダル獲得おめでとうございます。車いすバスケットボールに大きな扉が開かれたと思います。

**川原選手** 決勝でアメリカと競ったことや、準決勝でイギリスを相手に「走るバスケットボール」で勝てたということは、本当に大きな収穫になりました。チームのテーマであった「ディフェンスで世界に勝つ」ということと、スローガンであった「一心」ということを一貫してやった成果で、本当にうれしく思っています。

—車いすバスケットボールを始めたきっかけと障害の程度について教えてください。

**川原選手** 生まれたときから脊髄空洞症という病気で下半身に障害があり、お腹の下くらいから感

覚がありません。1.5クラスです。病院で地元のクラブチームの監督に声をかけられたのがきっかけですが、車いすバスケットボールを描いた漫画「リアル」(井上雄彦<sup>いのうえたけこ</sup>作)の影響もありました。2012年、高校1年生から競技に取り組むようになり、高校を卒業して18歳で千葉ホークスに入団しました。

—ご自身はパラリンピック初出場でした。

**川原選手** 最初は緊張して硬くなってしまいましたが、2戦目の韓国戦からは本当に楽しんでプレーできました。

—イギリスに勝ったときはどんなお気持ちでしたか。

**川原選手** 2018年世界選手権で金メダルを獲得

した強豪チームなので、胸を借りる気持ちで準決勝に臨んだのですが、実感がなかったですね。

—川原選手はディフェンスをはじめ活躍されましたが、自分の中でこれはいいプレーだったと感じられたのはどの場面でしたか。

**川原選手** イギリス戦でシュートを決めたシーンも印象的だったと思うのですが、決勝のアメリカ戦で、世界ナンバーワンのスティーブ・セリオ選手から意図的にファールを誘って取れたというのは本当に自信になりました。

—流れを引き寄せるようなプレーだったと思います。車いすバスケットボールにさらに関心が高まってきていると思いますが、車いすバスケットボールがさらに強くなるために県民の皆さんなどをお願いしたいことはありますか。

**川原選手** 健常者と障害者という偏見の目があって、これから先その目はなくなるかもしれませんが、差は縮められると思うのです。そのつなぎ役をするのが私たちパラアスリートだと思っていますので、フラットな気持ちで応援いただくとありがたいです。

—車いすバスケットボールの試合の迫力を会場で見ると、本当にアスリートの世界だというのが実感できると思います。

**川原選手** そうですね。生で見ていただくと、迫力があって本当におもしろいスポーツなので、

機会があればぜひお越しいただければと思います。—今後の目標を教えてください。

**川原選手** 天皇杯の優勝は悲願です。また、2022年11月に開催される世界選手権で結果を出すということも目標にしています。追われる立場になり、勝ち続けていくということがまた重要になってくると思いますので頑張りたいと思っています。—車いすバスケットボールの魅力についてお伺いします。

**川原選手** マシンとマシンがぶつかり合うので、「激しさ」が魅力の一つ。もう一つは、障害の重い人と軽い人が共にコートに出るといった特徴があるのですが、その中で生み出される連携プレーというのが車いすバスケットボールのおもしろみだと思います。その魅力を今やらせてもらっている学校での講演やメディアなどを通して伝えていければと思っています。

—最後に、県民の皆さんへのメッセージをお願いします。

**川原選手** 千葉県民の皆さんは、車いすバスケットボールをはじめとするパラスポーツに対して本当に理解を持っていただいていると感じています。皆さんにもっとパラスポーツ、そしてパラアスリートを見ていただけるよう頑張っていきますので、これからも応援をよろしくお願いいたします。



練習中の川原選手

